

子供の癩癩のようだと思う。

何よりも大切で、誰にも渡したくなくて、取り上げられそうになって、床にたたきつけて踏みつけにする。

バラバラになった宝物を呆然と見下ろして、自分で壊したくせに大泣きして、かけらを集めて抱えて眠る。

目が覚めたら、宝物がもとに戻っていますようにと祈りながら。

「なーんか、最近すっかり反応薄くなってきちゃいましたね」

何もなかった地下室に、オーリのためにベッドを買った。

すべらかな絹のシーツにうつろに倒れ、マルスに犯されながら声も上げないオーリの姿は、まるで精巧な人形のようなだ。

「オーリさん。ほら起きて。起きないと、この前みたいにもーっと酷いことしちゃいますよ？」

マルスがオーリの頬を軽くつねる。

それを見とがめて、ベッドサイドにやる気なく座っていたハーランは、マルスの腕を軽くつかんだ。

「ケガはさせるな」

「ちよつとつねっただけですよ。ねー？ オーリさん」

答えないオーリの体を膝の上に抱え、マルスは唇の隙間に舌をねじ込む。

応じない舌を引き出して軽く吸い、繊細な腸壁を下から激しく突き上げると、少しだけオーリが苦しそうに眉をひそめた。

「う……あ……」

「ん？ これ、きもい？」

「う……うう……」

弱弱しく首を左右に振る。

「ほら親方。俺だけじゃ足りないって。使ってあげてくださいよ。こっちは親方専用なんですから」

オーリの体を背後から抱えなおし、両足を大きく開かせて、マルスはとろりと愛液をあふれさせるオーリの胎の奥にハーランを誘う。

酷くうんざりとした気分で、ハーランは誘いに応じた。

その瞬間、

「……やだ」

オーリの唇から、拒絶がこぼれる。

表情を作ることを忘れた瞳からつうと一筋涙が流れ、その反応がマルスを喜ばせた。

「やっぱり親方が相手だと反応する。オーリさん、親方のこと大好きですねえ」

「やだつってんだろ、耳腐ってんのかお前」

吐き捨てて、自分を征服しようとする男の体を必死に押しつけるオーリの腕を、ハーランは自分の首の後ろに回させた。

「ほら、何度も教えただろ。腕はここ」

「やだ……やだ……や……い……あ、ああ……」

抵抗を無視して、ハーランは奥まで押し入る。

そうすると、人形のようなだったオーリのつま先がびくりと跳ねて、与えられる苦痛から逃れたたくもがくように、ほっそりとした腰がうごめいた。

「ほーら。気持ちよくなってきた。よかったですねえ、オーリさん」

楽しいマルスとは対照的に、ハーランは無言のまま、オーリの体を快楽で痛めつける。オーリは自分を苦しめている相手にしがみつき、耳元ですがるように「助けて」と繰り返すことしかできずにいる。

自慰のような虚しさの中で、オーリの中に憂鬱な快楽を吐き出して、ハーランはベッドを離れた。

いつまで、こんな毎日が続くんだろうか。

いつまで、こんな毎日が続けるんだろうか。

誰かが。

このかわいそうな女の子を。

助けてくれればいいのに。

時々ふと、そう思う。

オーリにはもう、薬を与えていない。

どれだけなだめても暴れて喚くオーリに自死を選ばせないため、毎日与える量を増やした結果、与えなくても戻れないところまで精神は鈍化した。

それなのにまだ、オーリはハーランを見分けて拒絶する。

マルスに触れられてもされるがままでいるのに、ハーランが触れるときだけ、わずかに正気を取り戻し、泣いてもがいて苦しむのだ。

憎しみが、そうさせるのだろうか。

自分をこれほどまでに苦しめる男に触られることを、理性を半ば失ったオーリの本能が拒むのだろうか。

ならばまだ、たらない。

もつと壊さなければ。

もつと深いところまで。

「そーいえば、また来ましたよ。『親方が飼ってる女を売ってくれ』って変態が」

「――また？」

オーリの尻を高く抱え、上半身をベッドに押し付けるようにしながら、マルスは軽く息を跳ねさせながらふと思いついたようにハーランを見もせず言った。

「どっからかぎつけてくるんでしょねえ？ まあ、一ヶ月は商館で監禁してたわけですし、女中とかから漏れたのかな？ 親方が大事にした女の子が商館から消えて、マルスと親方が地下室に通ってる——って。いかにもヤバそうですもんねえ」

酒瓶の栓をあけ、乾いた体にアルコールを流し込みながら、ハーランはマルスの言葉にどろりとした不快感を抱く。

予感があった。

静かに、背後に迫るような予感——それが、急に形を持ったような気がする。

「そろそろ場所移します？ 毎日通うんだったら、商館の地下倉庫でも改造したほうがバレにくいと思いますけど。あ、ちよつと待ってくださいね。いきそ……」

女を犯す男の姿は、酷く滑稽で見苦しいとハーランは思う。

マルスとオーリから目をそらし、ハーランは酒瓶を片手に熱い湯を用意し、クローゼットからオーリに着せる服を選んだ。

三日に一着の勢いで、オーリのクローゼットには服が増えていく。

ハーランもマルスも、競うようにオーリに似合う服を選んでくるからだ。ほとんど着せ替え人形のようなだった。

着せた服はすぐに破かれ、汚れ、使い物にならなくなるから、クローゼットの中身は一ヶ月もあればすっかりすべて入れ替わる。

「いつまで抱き着いてんだ、どけ」

「いつてえ……！ 親方ひどい！」

ことが終わって、オーリの髪を撫でていたマルスをベッドから蹴り落とし、ハーランはオーリの汚れた体を優しくふいた。

最初の日から、ずっとそうだ。

すべてが終わって、ドロドロになったオーリの体を、ハーランが整えている。

マルスは「それって俺の仕事じゃないですか？」と不思議がるが、そんなことはどうでもよかった。

自分の手で汚しているくせにどうかしていると理解はしている。それでも、自分の手でオーリがきれいになっていくのが、ただ嬉しい。

汚れをすっかり拭き終えて、新しい服を着せる。

ベッドに新品のシーツをかければ、全部元通りだ。

「で、場所のことですけど」

「ああ、考えとく」

「ほんと、お願いしますからね」

地下室から去っていくマルスの足音を聞くとともに聞きながら、ハーランはオーリと同じベッドに横たわる。

抱き寄せた体は無防備で、あたたかくて、柔らかくて、オーリを抱いているときだけ、ハーランは安心して眠ることができる。

うとうとしかけたところに、足音が響いた。

マルスが戻ってきたのかと、うつすらと目を開ける。

だが、すぐに違和感に気づいて飛び起きた。

足音が——一つじゃない。

「オーリ、起きろ。こっちに」

疲れ果てて眠っているオーリを抱き上げて、ハーランはとっさにクローゼットにオーリを隠した。

戸を閉めて、降りてくる足音を待つ。

予感があった。

本当はずっと。

ずっとこの日が来ると知っていた。

「ハーラン！」

久々に耳にする——それだというのに耳慣れた男の怒声に、ハーランは心臓をつかまれたような気分になった。

クローゼットを背に隠すように振り向いて、ハーランが対峙したのは、表情と顔色を失った昔馴染み——ヴィスクだった。

その背後に並んでいるのは、市警察だろうか。

「……なんの用だ？ 見ての通り、ここは俺の秘密基地だ。お前を遊びに誘ってやった覚えはない」

「自分が何をしたか分かってるのか？」

噛み合わない会話に、息が苦しくなる。

ヴィスクは無人の部屋にざっと視線を走らせて、一言「クローゼットを」と警察に指示を出した。

だが、ハーランはクローゼットの前を動かない。

「開かせない。お前にそんな権利はない」

「その中に、孤児院からさらわれた少女がいなかったら、いくらでも僕を責めればいい。だがオーリがお前の馬車に乗ったという証言がある。商館でお前が少女を監禁してるという噂もある。最近は毎晩この地下室に通っていることも確認した」

「さらったんじゃない、オーリはお前から逃げてきたんだ。耳を舐めたんだって？ お堅い院長先生の顔して、とんだ変態だな。市警察はそいつを先に逮捕したほうがいいんじゃないねえのか？」

「……いるんだな。その中に」

ヴィスクは挑発に応じない。

苛立って、ハーランはさらにヴィスクを責めた。

「だったらなんだよ。俺からオーリを取り上げて、今度はお前が監禁するのか？ 俺が保護した時、オーリは男に怯えて震えてた。お前がオーリを怖がらせたんだ！」

ハーランの叫びに答えず、ヴィスクは冷えた目で警官を促す。応じて、数人の男がハーランを無理やりクローゼットから引きはがした。

「おい、離せ！ やめろ！ 開けるな！」  
警官は暴れるハーランを床に引き倒し、両手を背中でまとめて縛り上げる。その目の前で、ヴィスクは悠々とクローゼットを開いた。中に、穏やかに眠るオーリがいる。

「オーリ……よかった……!!」  
心から安堵した様子で、ヴィスクはオーリを抱きしめた。うつすらと開いたオーリの目が、不思議そうにヴィスクを見る。

「……ヴィスク？」  
「迎えに来ましたよ。一緒に孤児院に帰りましょう」

「孤児院……？」  
うつろに呟いて、オーリは首を傾げる。

「オーリ……？」  
「ん？」

「……薬を飲ませたのか？」

孤児院の院長という仕事柄、ヴィスクは様々な問題を抱えた子供を数多く見てきている。オーリの様子ですべてを察したヴィスクは青ざめ、引きつり、耐えられないというように口を押えた。

その明らかな狼狽に、暗い優越感が沸き起こる。

「そうだよ……そうだ。嫌がるオーリを俺とマルスで毎晩犯して、泣きわめくのを葉で黙らせた。男と女ができる『火遊び』で、俺たちがやってないことは一つもない。ぞつとするだろ？ なあ、ヴィスク。オーリに触って、吐いてもいいんだぜ？ 昔みたいにさ。お前すげえ潔癖だもんなあ！」

「黙れ。——もう、お前を弟とは思わない」  
吐き捨てて、ヴィスクはオーリを抱き上げた。

オーリはヴィスクの肩に頭を預け、大人しくされるがままになっている。痛みで、体の内側から引き裂かれるようだった。宝物だ。

壊して、踏みにじっても、本当に大切な宝物なのに——。

「触るなよ……その女に触るな！ オーリは俺のだ！ 俺のだ、俺のだ！」  
答えず、ヴィスクはハーランに背を向けた。

「返せよ！ 返せ！ オーリ……オーリ！」  
「ハーラン？」

オーリが答えて、ぎよつとしたのはヴィスクもハーランも同じだった。ヴィスクの腕の中で、オーリは居心地悪そうに身じろぎする。

「ヴィスク……ハーランが、泣いてる……」

「オーリ。いいんですよ。いいんだ。あれはハーランじゃない」

「ハーランだよ。おろして」

オーリはヴィスクの腕から降りようともがく。

壊したはずなのに。

壊れたはずなのに。

人形のようなだったオーリが、自分の意思で。

「いじわるはだめだよ、ヴィスク」

あまりにオーリがもがくから、ヴィスクはしぶしぶオーリを床に下ろした。

ふらふらとおぼつかない足取りで、オーリは床に付したままのハーランに駆け寄る。

「どいて。いじめないで」

困惑する警察を押しわけ、オーリはハーランの頭を抱き寄せた。

そして、

「いじめないで」

と繰り返す。

急に、自分が何をしたかったのか、何もわからなくなってしまった。

ただ、二十五年前、泣き虫だった頃のハーランを守ってくれたオーリの強さを思い出して苦しくなる。

壊れてまでも、ハーランを守ろうとしてくれる、その優しさに耐えられなくて、ハーランはオーリの膝で泣き出した。

「……ごめん。ごめんなさい……ごめん……俺……ごめん……ッ」

マルスの賭けを退けることなんて、いくらでもできたのに、ハーランはオーリを守らなかつた。

マルスの口車に乗ったことに腹を立てて、癩癩を起して、マルスを信じたオーリを罰するために、一緒になって踏みになった。

誰かが、オーリを助けてくれればいいと思った。

きっとそれはヴィスクだと、わかっていた。

噂が立っていたことはとっくの昔に気づいていた。

ならばヴィスクがかぎつける。

「……連れてつてくれ」

オーリの膝で泣きながら、ハーランは絞り出すように言った。

「早く……ここから……オーリのこと……！ 助けてやって……俺から……」

「ハーラン、お前……」

「頼むよ……ヴィスク……」

知っていた。

誰も欲しがらなくなるほど徹底的に壊しても、ヴィスクはオーリを見捨てないと。

顔を潰して、四肢を奪い、心を壊しても、たとえ命を奪っても、ヴィスクはオーリを諦めない。

ハーランを慰めるように髪を撫で続けるオーリを、再びヴィスクが抱き上げた。

「ありがとう……来てくれて……」

「や……ハーラン……ッ」

ハーランから引きはがされることを嫌がって、オーリはもがいた。

「大丈夫だよオーリ。ヴィスクと行って。俺は大丈夫だから」

ハーランが優しく言い聞かせる、オーリは暴れるのをやめて、大人しくヴィスクのするに任せる。

賢いオーリ。

マルスに対して何の反応もしなかったのは、ただ壊れていたんじゃないじゃなくて、反応するとマルスが面白がるかわかっていたからだ。

ならばハーランを拒絶した理由は何だろう。

気づいていたんだろうか。

オーリを抱くたびに血を流していたハーランの心の歪さに。

だから拒絶し続けたんだろうか。

ハーランの心を守りたくて。

「バカな女……」

ヴィスクが立ち去る足音を聞きながら、ハーランは顔を決して上げないように、床に額を押し付けたまま吐き捨てた。

そして、

「……愛してる」

命よ終われと願いながら、ハーランは舌を噛み切った。

魂の苦痛に耐えられない人々はこの先へ。

茶番に耐えない人はこのままぞ。

「——って感じに絶対なりそうなんで、このへんが潮時かなって」

突然のマルスの申し出に、ハーランは面食らう。

「潮時……？」

「ぶっちゃけそろそろ飽きてきましたし。俺、基本的に女の子いじめるのってあんまり好きじゃないみたいなんですよね。最初は興奮したんですけど、最近なんか夢見が悪いとか、普通に生活してても俺、あんなにひどいことしてるのに、普通に生活していいのか……？」みたいな哲学入っちゃって」

「オーリを解放したとしても、その哲学は永遠にお前を苦しめることになるけどな」

「まあ、そこは罪に対する罰ってことで。やっちゃったもんは受け入れるしかないですよねえ」

へらりと笑って、マルスは地下室のカギをハーランに渡した。

マルスと、ハーランと、二人のカギがそろわないと、地下室は開かないようになってる。

ハーランがオーリを連れ出して逃げるのがないように、そしてマルスが身勝手にオーリを傷つけることがないようにという取り決めだ。

「ってーか、この賭けに負けてからの親方って、オーリさんを溺愛監禁してたときよりはるかに能力落ちてるっていうか……だから俺、うわぁ下手うったなあって思ってたんですよね。ぶっちゃけ今、商館の仕事回してんのほとんど俺じゃないですか」

否定はできない。

地下室にいるオーリのが気になって、商談中も上の空というありさまだ。

それでいくつも破談になった。

最近ではいっそ引退してオーリと地下室に閉じこもることを画策するほどで、商売にはまるで身が入っていない。

「ヴィスクさんが感付きそうな空気もありますし。もういいですよ。俺の負けで」

「負け？」

「個人的な賭けってやつです。親方がオーリさんに飽きたら、俺の勝ちで、オーリさんをどっかの金持ちに売り払って一儲け。いつまでも飽きなかったら俺の負けで、俺が手を引く」

「お前いつか破滅するぞ、その遊び」

呆れて言ったハーランは、ふと、ここ最近まわりついていた陰鬱な重苦しさが胸の奥から消えていることに気が付いた。

ああ、終わったのだ、と思う。

もう、オーリを苦しめなくていいのだと。

マルスと別れて、ハーランはすぐにあらゆることを手配した。

日中にできることをすべて済ませて、日が落ちてからオーリのいる地下室に走る。

早く助けてやらなければ。

早くあの地下から出してやらなければ。

早く、早く、早く自分から解放してやらなければ。

地下室に降りると、葉でもうろうとしていているオーリは、人形のようにベッドに横たわっている。

「オーリ、起きてるか？」

声をかけると、答えず、オーリは顔だけをハーランの方に向けた。

まるで無軽快なその様子に、ハーランは罪悪感を押し殺して、できるだけ優しく微笑んだ。

そして手を差し伸べる。

「おいで……ここから出よう。マルスのやつが、もう飽きたんだってさ」

←何が何でもハッピーエンドSSへ